

メッセージアウトライン

ローマ13：1～7「神によって立てられたもの」

[1]「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです」

「上に立つ権威」とはここでは国家の権威という意味で使われている。それは人間が勝手に作り上げたものではなく、神によって立てられた支配、権力であるとパウロは言う。それは神の摂理によって立てられているものであり、それゆえクリスチャンもこの世の権威、権力に対してしっかりと義務と責任を果たさなければならない。

[2]「したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにもとめられているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます」

ここでパウロは決して神の権威と地上の権威が全く同一と言っているのでも、上に立つ権威が常に正しいと言っているのでもない。ただ、地上における支配的権威はその制定と存在において神によっているのであり、それは社会の秩序と平和を維持するために存在するものである。もし上に立つ権威が神のみこころに反するようなことを命じたり強制したりするようなことがあれば、それらに従う必要はない。→使徒5:29

信仰者は常に何が神のみこころかを求めつつ、自らの責任を果たしていくことが大切。

[3-5]「支配者を恐ろしいと思うのは、良い行いをするときではなく、悪を行うときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行いなさい。そうすれば、支配者からほめられます。……」これは善を行うことの現実的で積極的なすすめであり、そのような生き方をする者は支配者を恐れる必要はない。4節はその理由である。神によって立てられた支配者はサタンのしもべではなく、神のしもべなのである。「剣」とは権力の象徴。支配者は神の怒りを現実的に執行するものである。また5節で言われているように、ただ怒りが恐ろしいから従うというだけではなく、良心のゆえにも従うのである。

[6]「同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです」

「みつぎ」とは税金のこと。支配者は神によって立てられた神のしもべであり、その権威は神による権威であるゆえに、また信仰的良心のゆえにもクリスチャンは税金を納めなければならない。そしてこの税金は一人一人の益のために用いられるのである。

[7]「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい」

7節は今までの要約となる箇所である。ここで「みつぎ」と「税」と二とおりの言葉が使われているが、この場合「みつぎ」は直接税のことであり、「税」とは物にかけられる間接税のことである。

このように、クリスチャンは神によって立てられた権威に積極的に従い、その義務を果たし、また善を行っていくことによって、それが良き証しとなり、この世に神の栄光を現していくことができるのである。